

旭川市民農業大学ＡＮＤでの稲作体験

前回に続き、旭川市民農業大学での農業体験、今回は稲作の様子です。

【種まき・苗作り】

4月中下旬、初回の授業で、稲の種をまいて苗床を準備しました。稲作体験は、苗を与えられて田植えから始まるものだろうと想像していたので、種まきから始めるとは思ってもみませんでした。

稲作の指導役は、農家の浅野さん。卵パックを利用して苗床を作ります。卵パックの底に水はけ用にカッターで切り込みを入れてから、苗用の土を盛った後、卵1個分のスペースにつき1つ指で穴をあけて、各穴に3～5粒ほど稲の種をまきます。種は、浅野さんが、薄い塩水に浸した種の中から沈んだ重い種を選別し、それらを水に浸した状態で水温を日々計測して、発芽条件となる合計温度が100度になる状態に準備してくださったものでした。次に種の上に土をかぶせ、土を圧縮してから水をかけ、卵パックの蓋をして輪ゴムを掛けると、苗床の準備は完成です。

苗床を自宅に持ち帰り、直射日光の当たらない部屋の一角に置いておくと、1週間くらいで発芽します。発芽が確認できたら、卵パックの蓋を開けっぱなしにして、天気の良い日にベランダに出して日光にあてるなど、1カ月ほど育てます。途中で、一つの芽から葉っぱが3～4枚出てきた頃に、卵パックの受け皿となるトレイに水を張って卵パックの底から水を染み入らせて、苗が根からも水を吸収できる環境にします。発芽後に十分光をあてることや、根から水を吸収させることが元気な苗を育てるのにとても重要なポイントと教わりました。

苗床を持ち帰ってから6日目に、土の中からとても小さな薄緑色の芽がチョコンと顔を出しているのを見つけた時は、とても嬉しく、小さな芽が愛おしく感じました。発芽後、すくすく伸びる芽に朝晩水を与えながら成長を楽しみました。

【田植え】

こうして自宅で育てた苗を、5月下旬に神居古潭にある浅野さんの田んぼの一画に持ち込んで植えました。

驚きだったのは、参加者が持ち寄った苗の育ち具合が多種多様だったことです。皆同じ日に同じ条件で種をまき育てた苗でしたが、この1カ月間で、苗の高さや色、茎の太さ、根っこの状態が千差万別でした。一同に並んだ苗を見比べて、苗の育て方はその後の収穫量にも大きく影響する技術なのだろうと想像しました。

田植えは、田んぼに目印の棒で区分して割り当てられた各自の区画に、一人10株ほどの苗を2列にして手植えで行いました。

田植え後、参加者は稲刈りまで特段の作業は行わず、浅野さんに田んぼの管理を行って頂きました。気温・水温が低い時期は、夕方に用水路から水田に給水を始めて張られた水を、翌朝から日光で温めるという水温管理も行われていることを知りました。

【稲刈り】

9月初旬に、各自で植えた10株ほどの稲穂を収穫しました。ノコギリガマは切れ味抜群の取扱注意なので、浅野さんの実演解説をよく聞いて、稲の刈り取り方法と、刈り取った稲の束ね方などを学んだうえで、収穫しました。一株あたり5粒ほど植えた種が、収穫時に両手で抱えるほどに育ったボリュームに感動しました。

収穫した刈穂を藁で束ね、稲穂部分にネットをかけた状態で自宅に持ち帰り、ベランダで1カ月ほど乾燥させました。稲穂の部分を下にして天日干しすると、茎の中の養分が稲穂の方に下がって、籾(モミ)に追加的な養分補給がされるということも教わりました。

【脱穀】

10月初旬、稲穂を浅野さんの農場に持ち寄って脱穀作業を行いました。

脱穀は、千歯扱き(せんばこき)という道具を使って、鉄の歯の間に稲穂を挟んで引っ張ることで、稲穂から籾を落とす方法で行いました。千歯扱きはよくできた道具で、効率的に籾を取り出すことができましたが、長く続けると腰に来る作業でした。

脱穀後、籾の総重量を計測し、少量の籾の籾すりを行って籾殻を取り除き(すり鉢に籾を入れてソフトボールのボールで圧力をかけて籾すりする方法を知りました)、お米の水分量を測定しました。参加者の計測結果を見ると、苗の段階でほぼ結果が見えるような印象で、苗づくりの大切さを実感しました。

収穫したお米は、最終授業でおにぎりにして皆で味わうのですが、残念ながら私は都合があわず参加できませんでした。

日本人の大切な主食であるお米作りを、種まきから精米状態までの一連の作業体験を通じて、農作業の大変さや美味しく育てるための技術などを学ぶことができた非常に有意義な機会でした。また、農家の皆さんへの感謝の念を新たにしました。家族にも体験させたい素敵な企画でした。

(毎月第四週に掲載します)



【佐藤弘康(さとう・ひろやす)】 1970年、宮城県出身。東北大学法学部卒。システム情報局企画役、決済機構局企画役、業務局企画役、発券局戸田発券課長を経て、2025年、旭川事務所長に就任。